

「娘、はや7歳」

細田 浩一（稲門弁理士クラブ）



今、目の前で毛づくろいをしている猫。名前を「びーちゃん」という。

名前の由来はごく簡単で、彼女（メスなので。）が家に来た時、「びー、びー。」と鳴いてばかりいたというだけのこと。その姿を見て、私の母が「びーちゃん」と呼ぶようになり、家族にも「びーちゃん」が定着したのだった。

もう慣れたので「びーちゃん」以外にふさわしい名前は思い当たらないのだが、冷静に考えてみると、あまり上品な名前ではない。思えば、私の実家で暮らす猫は、この「びーちゃん」を含め3匹とも、家にやって来た時の鳴き声に由来した名前が付いている。一番年上は「みよん」という。彼女も「みよん、みよん……」と、不安そうな声で鳴いていたので、やはり母が「みよん」と命名した。そして、「みよん」の娘である2匹目は、母猫に顔がそっくりだからということで、私の姉に「みにみよん」と名付けられたのだった。

「みにみよん」には、3匹の兄弟姉妹がいた。ところが、とても5匹も飼いきれないということで、地元タウン紙に「子猫差し上げます」の記事を出したところ、3匹が飛ぶように貰われていき、4匹目も「欲しい」と言われれば差し上げるつもりだったのに、たまたま貰い手が付かなかったので我が家に残ることとなった。しかし、母猫「みよん」にとっても、また私の家族にとっても、4匹ともいなくなるのは寂しかったので、ちょうど良い結果だったのかもしれない。

「みにみよん」が生まれたのが、私が高校を卒業する頃だったから、「びーちゃん」の登場は、それからちょうど10年後ということになる。

私が会社に就職してから4年が経ち、まだまだ一

人前とは言えないまでも、ようやく周りが見えて心の余裕が出てきたという時期に、私は山形県の酒田市という所に断続的な長期出張をしていた。

酒田といえば、日本酒が好きな人なら「初孫」の土地だとわかるかもしれない。また、登山好きなら「鳥海山」でピンと来るだろうか。夏スキーの「月山」も近くにあるし、飛鳥（とびしま）を知るアウトドア関係者も多いことだろう。鉄道好きには「特急いなほ」の停車駅ということで……。

もうちょっと続けると、写真家の「土門拳」や、地主の「本間家」、NHKドラマ「おしん」にもゆかりがある。派手さはないものの、心安らく土地であり、私は大好きだ。ここまで読んでくれた方がいるとしたら、何かの縁だと思って、ぜひ一度訪れてみて欲しい。

さて、「びーちゃん」と酒田の関係に戻るが、実は彼女の出身地が酒田なのである。

社用車で、同僚とともにホームセンターから作業現場に戻る途中、赤ん坊の泣き声とも思えるほどの大きな鳴き声が聞こえてきた。ちょうど、通り雨が強く降っていた時だったので、そこに何がいるのか



把握できるまでに時間がかかったが、黒っぽい柄の子猫が、母親を求めのように道路脇の草むらで、大声で鳴いていたのだった。猫には反応しやすい私は、車を路肩に寄せることもせず、子猫の脇で停車し、車を降りて子猫に近寄った。

子猫が警戒して逃げってしまうのを心配して、腰をかがめてゆっくり近づいたのだったが、まだ目がよく見えていないのか、子猫は全く逃げることもせずに、ただ大声で鳴き続けていた。背後では後続車のクラクションが鳴り響いていたが、助手席にいた同僚が運転席に移り、その場を取り繕ってくれていた。

さあ、ここからどうするか困った。自分の置かれている状況を冷静に考えれば、この子猫を作業現場で飼うわけにもいかなければ、旅館に連れ帰って飼うわけにもいかない。自宅に宅配便で送れば、文字通り『クロネコ宅配便』になるが、そういう問題ではない。とりあえず、作業現場のプレハブ小屋に連れて行くことにし、それから何日間かは、仕事の合間に、同僚と交替で子猫の世話をすることになった。

数日後、自宅に電話をしてみた。2匹飼っている猫が3匹になっても良いかと、必ず反対する父を避けて猫好きの母に聞いてみた。

母は、断固として反対したが、私は半ば無理やりに、東京で貰い手探しをすることを約束し、子猫を自宅に連れて行くことに母に伝えた。そして、次の週末に、電気アイロンの入っていた小さな空き箱に新聞紙を敷き詰め、その上に子猫を寝かせ、新幹線で帰京した。

その年の夏休みは、子猫にミルクを飲ませながら、電気関係の資格試験のための勉強をするという、妙

な一週間を過ごすこととなった。

夏休みが終わっても出張は続いてしたが、1～2週間ごとに帰京するたび、子猫の成長振りには驚かされた。片手に乗るほどの大きさだったのが、次に会う時には家の階段を難なく上り下りしていた。そして、家で飼われていた2匹の先輩猫にも喧嘩をふっかけるなど、いつの間にか、我が家でいちばんの暴れん坊猫にのし上がっていた。

「びーちゃん」はメスなので、「暴れん坊猫」ではなく、せめて「お転婆猫」とでも言わないと失礼なのだが、当初は母の素人鑑定により、オス猫ということにされており、オスだから性格が荒っぽいのだということで皆納得していた。そのため、当初の約束どおり貰い手探しをする段になっても、近所のスーパーに「元気なオス猫です！」という張り紙を掲示してしまっていた。張り紙を見て、実物の「びーちゃん」を見に来た父娘親子もいたのだが、あまりの「お転婆」というか、やっぱり「暴れん坊」というのがぴったりの振る舞いを見てか、「可愛いんですけど、家内を説得しないといけないので。」という丁寧なお断り言葉を残して帰って行った。

結局、「びーちゃん」の貰い手は付かなかった。「顔が悪いもんね。あれじゃ貰い手は付かないよ。」と、母も父も姉も口を揃えて言っていた。確かに、黒と黄色と茶色の迷彩模様のような「むちゃむちゃ柄」が体から顔まで続いていて、どことなくギャングっぽい。しかし、愛着を持って眺めてみると、なかなか可愛い顔をしているものだ。

こうして、「びーちゃん」も晴れて正式に家族の一員となったのだった。